



北岡泰典特別書き下ろしエッセイ

「いかにして自己啓発難民が 『ワクワク人間』になったか」

written by 北岡 泰典

November 2022

著作権：(株) オフィス北岡

<https://www.office-kitaoka.co.jp>

目次

1. 驚きの告白：北岡は、30 歳までは、「蟻地獄」に住む「どん詰まり」の自己啓発難民だった！
2. サハラ砂漠と欧米での放浪：「蟻地獄」からの脱出法を模索
3. 英国ロンドン市生活時代：「蟻地獄」からの脱出に成功！
4. 帰国後から現在まで：「蟻地獄」からの脱出法の教授と社会貢献

注：本エッセイは、2022 年 11 月の「北岡泰典 Instagram 発信開始記念キャンペーン」のために北岡が新規に書き下ろした特別エッセイです。

1. 驚きの告白：北岡は、30 歳までは、「蟻地獄」に住む 「どん詰まり」の自己啓発難民だった！

この私の告白は、おそらく誰にも信じてもらえないでしょうが、これが、私の 30 歳までの人生の真実でした。

私は、1956 年に和歌山県田辺市に生まれました。この町は、紀伊地方南部の太平洋に面した人口 8 万 5 千人の町で、江戸時代、徳川御三家の紀州徳川家が治めた紀州藩の陪臣だった紀伊田辺藩の三万八千石城下町でした（田辺城は現存していません）。

田辺には「三大奇人」がいます。この三人は、武蔵坊弁慶、博物学／文化人類学の先駆者だった南方熊楠、合気道創始者の植芝盛平です。

特に、1969 年に 86 才で亡くなった植芝の以前の墓は、真言宗の菩提寺の墓地にある私の家の墓のまさに「真右隣」にありました。生前の私の祖母の話では、多くの西洋人の合気道の弟子がその墓参りに訪れていたそうです。植芝の墓はそれ以来、同じ墓地の中の少し離れた場所に移され、現在は大きな墓石が立っています（ちなみに、NLP は「メンタル アイキドー」と呼ばれてきています！）。以下に、植芝の墓石の写真があります。

<https://www.taiten.info/images/ueshiba.pdf>

一言で言うと、田辺という町あるいは地域は、確かに、平安時代から江戸時代にかけては、近年世界遺産に登録された「熊野三山」への主要な参詣道（「蟻の熊野詣」という言葉がありました）の分岐点として要衝の地として栄えていたかもしれませんが、明治以降は、本州横断の交通網は東海道を中心に発展してきたので（まず東海道を整備された新幹線が、わざわざ名古屋から紀伊半島を通過して大阪まで走ることは考えられませんし、今後もありえないでしょう！）、「本州の盲腸」的な地位になって、文化的閉塞感を醸し出す状況になってきている、と言えると思います。

ただ、その中でも、南方熊楠や植芝盛平のような偉人を生み出した事実には、「あまりにも保守的な環境から、『エナシオドロミア』（二元論のうち否定あるいは抑圧された要素が、後になって必ず意識上に発現する、というユングのモデル。易経では「陰の極まるところおのずから陽が現われ、陽の極まるところおのずから陰が現われる」と言われています）」のメカニズムが働いているのでは、と私は思っています。言い換えれば、アインシュタインが「宇宙は歪曲

しているのです、自分の正面に向かって永遠に真っ直ぐ進めば、最後には、自分の頭の後ろに到達する」と言ったように、「保守と革新」、「右翼と左翼」のような二元論は、両極に触れすぎると、逆説的に、まったく同じ立場と主張になるのかもしれない。

私は、田辺に、予備校に通うために上京した 18 歳まで住み、このような土着的文化的背景に影響を受けながら幼少期と十代の人生を送りましたが、もう一点、私が後になって「究極の保守から究極の革新への変容」することに影響を与えた要素として、私の祖父の存在があったのかもしれない。

明治生まれの私の祖父は、「ボン ヴィヴァン (**Bon Vivant**)」(フランス語で「人生の享受者」を意味します) の人生を貫いた人で、やりたい放題の人生を送ったと私は理解しています。

私の家族の話によると、祖父は、明治から大正の時代にかけて、紀南地方で初めてオートバイを乗り回した「ハイカラ」な人だったようで、また、当時の畑仕事用のリアカーの鉄製の車輪に国内で初めてゴム タイヤを装着するアイデアを考案し、さらに同じくリアカーのブレーキ システムを発明した人のようです。当時、これらの発明で特許を取得しなかったようですが、取得していれば、おそらく億万長者になっていたのではないのでしょうか。

また、遊郭にも足繁く通う明治気質の「ダンディー」人間で、三味線、尺八、書道、写真の分野では、その腕はまさしくプロ級以上でした。

私は、**1981** 年に大学を卒業して、**2001** 年までサハラ砂漠と欧米で「精神的放浪」を続けましたが、その放浪中、常に、「私は、明治に生まれた私の祖父が現代 (**20** 世紀後半) に生きていたらおそらく歩んでいたであろう生き方をしているのでは」という思いをもち続けていました。おそらく、私の芸術的なテーストも、祖父の隔世遺伝を受け継いでいるかと思われます。

そういう私ですが、生後 **4** ヶ月のときに脳性麻痺に罹りました。**3** 日間ほど **40** 度の熱が続き、両目は上を向き白目だけになり、ひきつけが続き、医者は「この子は助からないだろう。助かっても痴呆症になるでしょう」と私の両親に言ったそうです。命が助かったのは、医者が脳圧を下げるために脊髄から髄液を抜くことを決断したからだそうですが、その後遺症として、左半身の麻痺症状が残りました。

その後、私の人生を通じて左手と左足の筋肉麻痺をもち続けていますが、**5** 才のときに、県庁所在市にあった、知的発達障害児と肢体不自由児を収容する、

西洋人のカトリック系修道女が運営する施設に入所し、小学入学までそこにいました。

小学 4 年生の秋には、田辺市の近郊に新しく知的発達障害児と肢体不自由児を収容する療育園が開設されることになり、再び施設に入所しました。この施設には小学校卒業時までいました。

私は、5 歳と 10 歳のときに入所したこれらの「閉塞的」な施設で、幼児性愛的な体験を含む一連の極度のトラウマ (精神的外傷) と PTSD 体験をもち、普通の中学校に入学した後は、「社会適応」はほぼ不可能になっていました。

実際、中学、高校、予備校、大学時代を通じてずっと、私は、「境界線症」とでも呼ぶべき非常に生きづらい、出口のない「蟻地獄」のような人生に落ち込んでいました。いわば、私は、いわゆる「最底辺の自己啓発難民」だったと形容できるような人間でした。

そのような私に、「もしかしたら、このような私でも『蟻地獄』から脱出できるのでは」という一筋の希望の光をもたらせた出来事が三つありました。

一つ目は、高校に入学した 1971 年に、この高校で起こった「学生運動」でした。実は、当時、まさしく革命前夜とも思われた全共闘の学生運動が「挫折」したのは、1969 年 1 月の「東大安田講堂事件」がきっかけだったと思いますが、この大きな運動の波が 1969 年に大阪まで伸びて、1970 年に和歌山市に波及し、やっと 1971 年に田辺市に、南下して、たどり着いたようです。

高校に入学したとたん、連日のように、体育館に校長、教頭、教師が呼びつけられ、生徒たちから詰め寄られる「総括」の場がもたれたりしました。

過激な左翼思想に染まった生徒たちが新聞部や文芸部を拠点にして、学生運動の主張を発信したりしていましたが、実は、私の人生において、私の感性と文化的素養の育成に最も影響を与えたのは、高校 3 年間の体験だったと思っています。

すなわち、私は、「社会変革」によって、自分の蟻地獄脱出が可能になるのでは、と感じた次第でした。

二つ目の出来事は、「心理的改革」を目指す精神分析との出会いでした。高校時代の私は、角川文庫等でシグモント フロイトと異端児ウィリアム ライヒの書籍に触れましたが、私の「極度の神経症」は、精神分析によって解消するのでは、と思うようになりました。

三つ目の出来事は、「ニュー・エイジ」とも呼ばれた「精神世界」との出会いでした。当時、中村とうよう主幹の「ミュージック・マガジン」等のアングラ雑誌で、「意識の改革」を唱えたヒッピーの権化のティモシー リアリーの弟子のリチャード アルパートがインドに行って、導師に弟子入りして、「ラムダス」になった、といった記事等を読み、私の「蟻地獄」も、インド人導師に弟子入りして、「解脱」を得ることで、脱出可能になるではないか、と思いました。

その後、二浪の後、都内の大学の文学部に入学し、仏文を専攻しました。フランス留学を経て、一留後、**1981**年に大学を卒業しましたが、なんと、私の人生で一番不毛だったのは、この大学生活の時期でした。

実は、私は、二浪の時、同じ高校出身の女性と半同棲しながらも、**1日12時間**以上の猛受験勉強を続けた結果、大学入試に合格することができましたが、そのことによって「極度の神経症」あるいは「境界線症」の症状が悪化し、常に他人の目が気になったり、自分の行動と思考に常に「ノー」と言うもう一人の自分の存在に、二十四時間苛まされたりしていました。

大学**1年**の秋には、半同棲していた女性のアルバイト先の出版社の編集長に彼女を寝取られたことをきっかけに、希死念慮をもつようにもなり、にっちもさっちもいかなくなり、大学のキャンパスのスロープで、天に向かって、「このような重度な神経症を治す心理学は世界に存在していないだろうが、もし仮にそれを見つめることができたなら、命をかけてもいい」と叫ぶことができました。

(今から思うに、「蟻地獄」から脱出できる最大条件は、「自分の命をかけてもいい何か」を見つめることではないでしょうか。)

3年次までに、フランスに二度語学留学したのですが、このとき文字通り「水を得た魚」の思いになり (海外に行けば、日本人の顔に出会わないので (NLP的に言うと、アンカーが発火しないので)、**PTSD**等のフラッシュバックが起らなかったのが原因でした)、希死念慮もなくなり、将来的には、日本を離れる決意をしました。

留学の後、帰国して、私は、留年時の**4年次**に、フランス語でマルセル プルーストの『失われた時を求めて』を読み、仏語で学士論文を書き上げましたが、この「左脳の耳年増」性が、「我慢の限界」となり、大学卒業と同時に、日本を離れ、仏語通訳としてアフリカ北岸のサハラ砂漠に赴くことを決意しました。

2. サハラ砂漠と欧米での放浪：「蟻地獄」からの脱出法を模索

そういうわけで、1981年の大学卒業後サハラ砂漠に滞在し始めたときから1988年にNLPの創始者のジョン グリンダー氏に出会うまでの時期が、私の「意識の実験」の試行錯誤期でした。

前章で、「蟻地獄」から脱出できるという一筋の希望の光をもたらせた出来事が三つあったと書かせていただきましたが、そのうち、「社会変革」の道は、「いくら外を変えても内は変わらない」という結論に達して、歩まないことになり、「精神分析の道」(すなわち「心理的変革の道」)も、あまりにも幼児期のトラウマの原因を探るという「過去志向」に嫌気がさし、この道も断念することになりました。

その上で、私は、三つ目の出来事の「精神世界または悟りの世界」を通じて自己変革することによって「蟻地獄」から脱出する道(すなわち「意識の変革」あるいは「精神の変革」の道)を選ぶことになりました。

大学卒業と同時に、私は、アフリカ大陸北岸部に渡り、1年間日本の大企業向けに仏語通訳に従事しました。以下に、当時のサハラ砂漠での私の写真があります。

https://www.taiten.info/images/sahara4_1.pdf

サハラ砂漠では、ローマ遺跡を訪れたことがあります。半円形の競技場からは2,000年以上前の観客の声が聞こえた気がしましたし、石畳の上に馬車が通る轍の跡が深く残っていて、悠久の歴史を感じてしまいました。

さらに、サハラ砂漠で、砂漠全体が見渡させる標高500m以上の台地の上に登った時、そこからは、太古に流れていたであろう無数の川の跡が見えました。そこで何気なく拾ったものは海で見つかる貝殻でした。ということは、この砂漠の高台そのものは、何十万年も前は海底だったということがわかりました。砂漠の前の人間の自我の矮小さを感じた次第でした。

また、このサハラ滞在時に、私は、弟子入りすべきインド人師匠が誰かが決まりました。大学在学当時から、バグワン シュリ ラジニーシについての国内外の雑誌記事を何度か目にはしていたのですが、このサハラ滞在中に、日本人の女性通訳さんと話をしていたとき、なにげなくバグワンの名前を出したら、彼女に「ああ、その人の本なら、一冊、キャンプ マネージャの部屋の本棚にありますよ」と言われ、その足でその部屋に飛んでいき、マネージャからその本を借りました。

それは、『マイウエイ 流れ行く白雲の道』という講話集(バグワンの本はすべて講話集です)で、私にとってそれまで体験したことのない世界が書かれていま

した。さらに、最初のページにあったバグワンの顔写真には、仰天しました。どの角度から見ても、私はバグワンに見つめられているような印象をもち、「この仕事を終えたら、直接インドに行って、この方に弟子入りしよう」と決めました。

ただ、翌年契約終了時に、バグワンは、腰を痛めて、すでに米国西海岸に渡ったという情報を得たので、インド行きは諦めて、稼いだお金で、1年間のヒッピー的な欧州バックパッカー人旅に出ました。

その後帰国し、今度は半年間の通訳仕事を見つけ、再度サハラ砂漠に滞在した後、1983年春に、念願のバグワンのオレゴン州コミュニンに行き、秋まで滞在している間に弟子入りして「Swami Prabodh Guhen」の弟子名をもらいました。

この後、また日本に戻って仕事を見つけてはサハラ砂漠に行く、ということを繰り返し、サハラ砂漠には通算3年間滞在しました。

この間、日本に戻った時は、国内のバグワンの瞑想センター／シェアハウスに滞在して、東京の大岡山のセンターでは、後述する、後に結婚することになるバグワンの弟子の女性と知り合ったり、京都のシェアハウスに住んでいたときは、一緒に住んでいたバグワンの弟子に仕事を紹介されて、京都市内の大手百貨店で、女子高校生相手にタロットリーディングをしたりしました。

バグワンのコミュニンには、1985年にも半年くらい滞在しましたが、私は、「ラジニーシ国際瞑想大学 (RIMU)」という施設で、7ヶ月間 (1,700時間) の「脱催眠療法コース」に参加したり、吹き抜けの大道場での日課の「クンダリーニ瞑想」中に、本当にクンダリーニ覚醒の体験をしたりしました。以下に、コミュニンでダンシング瞑想中の私の写真があります。

<https://www.taiten.info/images/puram.pdf>

コミュニンでは、仏陀時代の共同体 (サンガ) のような修行を体験し、特に、「脱催眠療法コース」では、カリフォルニア州ビッグサーにあったエサレン研究所式の当時最先端の西洋心理療法と東洋の瞑想法のほぼすべてを体験し、自分は、古代の瞑想僧侶のような「悟り」の経験をしていると感じていましたが、1985年に、コース受講中に、参加者のドイツ人の男性が私の耳元で、「あなたは、この催眠心理療法を最高と思っているかもしれませんが、最近 (10年前に) 生まれた NLP と比べたら、幼稚園の遊戯ですよ」という悪魔の囁きをしました。

私は、彼の言葉をまったく信じきれませんでした。ただ、上述のクンダリーニ覚醒の体験も、数週間後には、元の自分に戻ったり、RIMU のセラピーと瞑想の効果も、コミュニンを出て日本に帰ると、消えたりすることを発見して、「悟りの経験の後」の「一度経験した超常現象的意識をどのようにして日常生活で 24 時間再生継続できるか」が、私の最大課題となりました。

3. 英国ロンドン市生活時代：「蟻地獄」からの脱出に成功！

1985年のオレゴン滞在は、私の（同じくバグワンの弟子の）日英ハーフの女性との「新婚旅行」でしたが、その秋に、私たちはコミュニオンを離れ、英国ロンドン市に住み始めました。

ロンドン市では、この女性の勧めもあり、国内大企業の小会社の「お土産店」の総務部で働き始めましたが、徐々に彼女との関係が悪化して、その後、離婚しました。

「お土産店」で働いている間、私は、心理療法、催眠、代替医療等関係のワークショップやコースに数多く参加しましたが、当時の私の周りの人々が「NLPはすごい」と異口同音に言っているのを耳にして、また、当時通っていた催眠学校の「プロ」の校長先生までも、（当初グリーンダーの弟子だった）アンソニー ロビンズの本を小脇に抱えて、「NLPは極めてパワフルだ」とおっしゃったので、懐疑的だった私は、1988年春にロンドン市のリージェント カレッジで NLP 共同創始者のジョン グリンダーと当時奥さんだったジュディス ディロージャが開講した「個人的天才の必要条件：どンドン下に重なっていく亀」という4日間ワークショップに参加してみたのですが、この時、「頭がぶっとんでしまう」衝撃的な体験をしてしまいました。

その後 35年間私が師事して、モデリングしてきている「グリーンダー式 NLP」は、左右脳を超えた両脳学習法で、無意識を味方につけることで、文字通り、「普通の人を天才にできる」方法論だと確信しました。

また、クライアントの問題の詳細をいっさい聞くことなしに、クライアントのトラウマ等を解消できることにも、私はびっくり仰天しました。

すなわち、3年前のドイツ人の悪魔の囁きが正しかったことが証明された次第でした。

また、大学時代に、私は、天に向かって、自分のような「重度な神経症を治す心理学は世界に存在していないだろうが、もし仮にそれを見つけることができれば、命をかけてもいい」と叫びましたが、その心理学が NLP だった、ということになります。

最近の私の個人セッションのクライアントの方から、「北岡式 NLP は、極めて面白くて、死ぬまで、あるいは、死後まで、遊び続けることができる玩具箱の

ツールをいただきました」という感想をいただきましたが、私は、文字通り同じ感想を、当時、グリンダー式 NLP に対してもちました。

この 4 日間のワークショップの印象があまりにも強烈だったので、その年の夏に、職場の三週間の夏季休暇を利用して、カリフォルニア州サンタクルーズ市でグリンダー氏の「プラクティショナー コース」に参加し、さらに、翌年の夏も同市で、同氏の「マスター プラクティショナー コース」に参加しました。

それ以来、私はグリンダー氏とは友人ですが、2005 年に同氏を日本に招待して、「トレーナーズ トレーニング コース」を開講していただきました。

私は、1989 年の大晦日の日に、「意識の実験」を通じて「大悟」の経験をしたのですが、それ以来、首尾一貫して、「いかにして、悟りの状態を日常のシラフの状態に再生継続できるか」をテーマにして「意識の研究」を続けてきています。

「お土産店」からは 1989 年秋に退職し、その後、「日英投資コンソーシアム」に通訳／コーディネータと参加した後は、日英語の翻訳の仕事に就き、2001 年に帰国するまで、通算 15 年間ロンドン市に滞在しました。

その間、1995 年に、ドイツのミュンヘンで、NLP 共同創始者のリチャード バンドラーのトレーナーズ トレーニング コースを受講し、2000 年には、サンタクルーズの「NLP ユニバーシティ」で NLP 共同開発者のディロージャとロバート ディルツのトレーナーズ トレーニング コース等を受講しながら、「悟りの状態の日常生活での再生継続」を図るべく「意識の研究」を継続しながら、最終的に、念願の「蟻地獄からの脱出」の「意識の実験」に成功した次第です。

このようなプロセスを経ながら、私は「ワクワク人間」として、生まれ変わることができました。この事実は、30 歳までの自分を振り返ってみると、私にとっては、まさしく「奇跡」以外の何ものでもなく、「不可能が可能になった」道のりでした。

こうして、私は、「蟻地獄からの脱出法」を、過去の私と同じような経験をもつ国内の方々に伝え、共有させていただきたいという思いで、20 年間に及ぶハラ砂漠と欧米での滞在の後、帰国することを決めました。

4. 帰国後から現在まで：「蟻地獄」からの脱出法の教授と社会貢献

2001年に帰国した後は、2013年まで、資格認定業界でNLPを教えていましたが、私は、「絶対脱出不可能な蟻地獄からの脱出」を可能にした欧米式のNLPをそのまま教えたら、私のように蟻地獄から脱出する人々を増やせる、と思っていたのですが、NLP以前のセラピー、催眠、瞑想、意識の研究、その他の歴史が事実上いっさいない日本人に、NLPをそのまま教えても、真の自己変容をもたらすことはできないことに思い当たり、2013年以降現在まで、「エグゼクティブコーチ」として活動するかたわら、「欧米人と日本人のマインドセットのギャップをどう埋めることができるか」について、日夜模索してきています。

言い換えれば、私は、2001年の帰国後ずっと、GAF文化を含むシリコンバレー文化を創出して、世界をリードするイノベティブな企業と個人を生み出すことに成功してきている欧米（特に、米国西海岸）と、既存のアイデアを新規に応用することを「イノベーション」と呼んでいる日本との違いについて模索してきていました。

その中で、4年前に、欧米と日本のNLPの学習者の間にある思考形態の違いに関する、ある極めて重要な発見をしました。

その後、この発見に基づいて、「RPGゲーム」、「曼荼羅フラクタルリエンジニアリング(MFR)」、「ピークエクスペリエンス体感ワーク(ポジティブフラッシュバックワーク)」、「明鏡止水ワーク」、「鏡の国のアリス」等のテクニックを独自開発して、数多くの方々に施術してきています。

これらのワークを通じて、クライアントの方々は、「天命」、「ワクワク感」、「多幸福感」、「ドーパミン分泌状態」等の、あるいい状態を体験して、その状態を「保持」したまま、日常生活を過ごし、毎日の事象を新しい観点から見直し続けることができるようになり、さらに、その状態が「恒常化」されるようになります。

これまで、私は、北岡ワークに、「実践的顕魂学」、「覺者創出プロジェクト」、「GAF Japanプロジェクト」、「メタカルチャー運動」等、さまざまな名称を付けてきていましたが、今般、「北岡ワークの集大成」を始める目的で、「内的宇宙飛行士」(英語では、「Psychonaut」)という呼称を新たに使い始めるこ

とにしました。この呼称の意味は、「自分自身の内面の世界（内的宇宙）を、自由自在、縦横無尽に飛び回る人」です。

また、私は、内的宇宙飛行士となって、自分が送りたいと思っている人生を現実化して、「ワクワク感」を持ち続けることができるように人々を支援する一式のノウハウである「内的宇宙飛行学」の提唱者です（「内的宇宙飛行士」と「内的宇宙飛行学」の呼称は、現在、商標登録出願中です）。

この新しいプロジェクトの一環として、私は、最近、以下のサイトで、毎日の Instagram の動画配信を始めました。

<https://www.instagram.com/kitaokataiten/>

この Instagram の動画シリーズでは、皆さんの毎日の日常生活で抱えているさまざまな問題について、北岡が解決法をご提案させていただいています。

北岡ワークによって、過去の私のように、「絶対脱出不能の蟻地獄」から無事生還し、「内的宇宙飛行士」として生まれ変わり、四六時中「ワクワク感」すなわち「多幸福感」すなわち「ドーパミン分泌状態」にアクセスして、自分が送りたいと思っている人生そのものを生き続ける人々がどんどん増えていくことを、切に願っています。

編集後記 1: 本文を読み直してみて、ある興味深いことに気づきました。

易経では、**2020** 年は「庚子（かのえね）」の年で、これは **60** 年に一度の「新時代の始まり（一陽来復）の年」ということになっています。

「庚子の年」は、これまで、**1840** 年、**1900** 年、**1960** 年、**2020** 年となっていますが、**1840** 年は、吉田松陰の叔父が松下村塾を開講した年で、明治維新の発端となる「政治改革」の始まりの年でした。**1900** 年は、量子力学が生まれ、**1904** 年のアインシュタインの相対性理論の発端となった「科学的改革」の始まりの年でした。**1960** 年は、後のヒッピー文化を生み出した「ビートニックス」による意識の実験が行われていた「意識の改革」の始まりの年でした。

そして、**2020** 年の **2** 月の時点で、早々に、いみじくも「コロナ禍」が始まりました。「庚子の年」からは、「激動の新時代」が始まり、個人としては、新しい価値観を構築し、組織としては、新しい局面に対応できる人材の育成と活用を実践していかないかぎり、個人も、組織も、この大改革の時代を生き延び

ていくことはできなくなって、淘汰されていく、と言われていますが、まさにこの易経の予想が証明された年でありました。

私には、この意味で、**2020** 年は、「精神的改革」が始まった年、と定義しています。

本文では、私の自己変容の軌跡として、順に「政治改革の道」、「心理的改革の道」、「意識改革の道」、「精神改革の道」を歩んできたことが言及されていますが、この道のりは、(科学に心理学を含めるとしたら) 過去 **240** 年間の「庚子の年」の軌跡である「政治改革」→「科学的改革」→「意識改革」→「精神的改革」の文化的・社会的進化の過程とほぼ相互マッピング可能であることがわかりました。

編集後記 2: 本文の執筆後、改めて、私自身が、幼児期にどのようにして「蟻地獄」に入り、そして **26** 歳のインド人導師への弟子入りと **32** 歳のグリンダー式 NLP との出会いをきっかけに、最終的にどのようにして絶対脱出不可能な蟻地獄から奇跡的に生還したかについての考察を試みました。

その結果、精神世界の教えと NLP、および、ここ数年研究してきた神経科学と成人発達論の観点から、以下のことがわかりました。

- 1) 私は、「タブララサ (白紙)」の状態として生まれた。
- 2) 私は、**4** 歳までに、がんじがらめのプログラミング群 (これが「蟻地獄」の正体でした!) を作ってしまった。
- 3) その後、私は、そのプログラミングの作り方を忘れてしまい、その結果として生まれた「蟻地獄」の世界に閉じ込められたままになった (比喩的には、梯子を使って自分で建物の屋根に登ったが、その後、梯子を外され、屋根から降りられなくなりました)。このため、**30** 歳まで、この蟻地獄は文字通り脱出不能だった。
- 4) 今まで忘れていた (無意識化されていた) プログラミング群の作り方を、NLP、神経科学の発見等によって「見える化」することで、「プログラミング解除 (リバース エンジニアリング)」することができるようになった。このことで、脱出不能に思えた蟻地獄は、実は脱出可能であることがわかり、努力の結果、最終的に実際に脱出が可能になった (この「プログラミング解除」は、**4** 歳までにプログラミング群を作った「本人である私」の地道な作業でしかできない。)
- 5) 「蟻地獄」の入り方と出方がわかったので、その結果、永続的に出たままで、「ワクワク感」をもち続けることができるようになった。

今後、私は、「内的宇宙飛行学」の提唱者として、(おそらく世紀の大発見かもしれない)「マトリックスからの脱出法」のノウハウを、広く世界に伝えていきたいと思っています。